

## 金沢の地名に残る「染色のまち」の名残

金沢の旧町名や地名には、その土地の歴史や人々の営みを反映しているものがあり、加賀友禅の文化的な背景を今に伝えているものも見られます。

例えば、染め物が盛んに行われていた藩政期の金沢では、兼六園へとつながる坂に加賀藩の御用紺屋が用地を与えられ並んでいたことから「紺屋坂」（こんやざか）と名付けられました。

また、里見町の鞍月用水にかかる「あかねや橋」も、「茜屋」という染物師・茜屋理右衛門がこの付近に居を構えていたことにちなみます。かつてはこの用水で「友禅流し」が行われ、加賀友禅を支える水の文化を象徴する地名となっています。

さらに、もうひとつ。

金沢の旧町名「胡桃町」（くるみちょう）は、加賀に古くから伝わる染色技法

「黒梅染」（くろうめぞめ）と深い関わりを持っています。

この町の東内惣構堀に架かる橋を、当時この地に住む黒梅染を専門とする染師・黒梅屋にちなみ「黒梅屋橋」「黒梅橋」と呼ばれていたのが「くるみや橋」「くるみ橋」と転じ、この俗称が広く使われるようになりました。

明治4年の町名改定の際には「胡桃町」という名前が正式に採用されました。

もともとは染色文化に由来する橋名が、日常の呼び名を通じて町名へと変わっていたという経緯です。黒梅染の歴史と、人々の暮らしの中で生まれた呼び名が融合した、金沢らしい町名の成り立ちといえます。



「旧胡桃町」の標柱。兼六園下の交差点の側、金沢城石川門が見える場所にあり、現在の大手町・兼六元町・小将町の一部に相当します。町名由来の黒梅橋は現存していません。